
sister.

彩美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sister.

【Nコード】

N15860

【作者名】

彩美

【あらすじ】

そこは、高潔者だけが集まる学校だった。

その学校の近くにある教会に住む、名前も知らない、シスター。

少年は、そのシスターに恋をした――

1 緑の楽園

美しい緑に囲まれた校舎。

生徒たちは皆、従順。

今では該当する生徒は全くいないが、規則を破ると 死に至る罰を受けさせられる生徒。

——そんな所に、俺は通っている。

この学校はエスカレーター式ではなく、一応、普通の中学校。

・・・カタチだけ。

生徒数は特に多いわけでもなく、各学年2クラスずつだ。

俺はその中の、3年1組に所属している。

普通、中学校というものは 同じ小学校出身者が集まるものだが、
ここは違う。

それぞれ異なる地域から、皆 集まってきている。

進学校とか、そういうわけではない。

学力は、一般の中学校と同じくらいだ。

入学試験もない。

むしろ入学するのに、学力は全く関係ない。

・・・そして この学校に通う生徒は皆、学校の寮に住んでいる。

特に寂しそうにしている生徒もない。

俺？

入学してきたばかりならともかく、俺はもう3年生。

1年生の時からずっと寮暮らしだから、もうすっかり自分の家の気分だ。

・・・まだ遠慮することはあるけど。

そしてこの学校の生徒たちにも当然、「個性」というものがある。

明るい者、大人しい者、少々変わった者・・・。

このあたりは、普通の学校の生徒たちと変わらない。

だけれど、この学校のどの生徒にも、共通しているものがある。

——それは、何よりも「汚れ」を嫌い、何よりも「聖」を愛しているということだ。

俺はこの学校に入学したばかりの時、疑問に思っていた。

——もしかしたら、この学校は宗教関係の学校だったんじゃないか。

・
・
・でも、そういうわけではないらしい。

1年生の時、担任に聞いてみたが、即否定された。

・・・別に嘘をついているようにも見えなかったし、とりあえずは信じてみようと思った。

それに、現に俺が3年になった今でも、宗教らしいことは何一つしていない。

―――今、俺は自分の教室近くの廊下の窓辺にいる。

10分間の休み時間。

他にも、何人かの生徒が廊下を歩いている。

そして俺は、外の新鮮な空気を吸いに来ている。

・・・というのもあるが、実はもう一つ理由がある。

それほど遠くはない、十字架がメインの場所。

——教会。

外見からして、多分、中はそんなに広くはないだろう。

俺がこの学校を宗教系の学校だと思った理由の一つが、それだ。

それにしても。
何故、教会が？

この学校と何か関係があると思ったが、結局は違った。

「・・・・・・」

考えても、仕方がない。

俺はこの周辺の歴史には詳しくないし、宗教のこともあまり知らない。

本題に戻そう。

俺は、教会があることは1年生の時から気付いていた。

そして、そこに1人の女性が出入りをしていることにも、気付いて

いた。

その女性の顔を、近くで見たことはない。

学校の、こんな高い窓からしか、見たことがない。

——2年前、俺がこの学校に入学して、まだ1週間も経っていない時。

偶然、見かけてしまった。

あの教会に入っていく、女性の姿を。

何となく服装は見えた。

多分、あの教会のシスターだろう。

ほとんど白だが、黒もある。

頭に何かを被っている。

地面を踏んでいるであろう靴も、頭と同じく見えない。

歩きにくそうな裾を纏って歩く、その姿。

俺は、
一目惚れをしてしまった。

「
・
・
・
・
・
・
」

今日は、外を歩く姿は見ていない。

こんな日は、いつにも増して気分が沈む。

——知りもしない人間のことを好きになって、低俗だと思われるかもしれない。

でも、好きになってしまったのだ。

あと30秒ほどで、チャイムが鳴ってしまふ。

チャイムが鳴った時には自分の席に着いていないと、厳しく罰せられるのだ。

俺はあの人はいない窓から離れ、早足ですぐ傍の教室に入っていた。

——そして、こんな日は特に。

2年もチャンスがあったのに、たったの一度もシスターに声をかけることが出来ない自分を、恨むのだった。

2 出会い

『――図々しい人間は、地獄に堕ちるよ』

2年前。

俺がこの学校に入学した初日。

「・・・・・・」

担任に言われた言葉。

この言葉を聞いた時、正直、驚いた。

だって、入学したばかりの新生に・・・。

しかも、クラスの奴ら全員に笑顔で「入学おめでとう」と言い、軽くこの学校の説明をしたあとに。

“ 地獄に堕ちるよ・・・ ”

俺は今、学校の外にいる。

授業も全て終わり、ほとんどの生徒が寮に帰っている時間。
俺も授業が終わって、その後の掃除も終わると、すぐに学校を出た。

——そして今。

目の前には、今まで近付きたくても近付けなかった建物。

「・・・・・・・・」

・・・今の俺の目の前には、教会がある。

あの女性・・・・・・・・シスターの姿は見えない。

教会の中にいるのだろうか。

ここに来るまでに、一応外も探してみたけど、いなかった。

教会の中に入ったら、不法侵入になるだろうし・・・。

「・・・・・・・・」

そんなことを考えているうちに、もう3分も地に足が着いたままだ。
間違いない。

さっき12分だったから・・・もう15に長針が移動している。

「・・・」

仕方ない。

教会の周辺を歩き回ってみよう。

案外庭なんかあって、シスターもそこにいたりするかもしれない。

俺は重い両足を上げて、教会の周辺を歩き回ることにした。

うーん。庭らしきものは見当たらない。

辺りは本当に緑だらけだった。

——遠くから見たらきつと、この教会も緑に映えるんだろうな——

と、思った瞬間。

俺の右肩にかすれそうな距離に、風が舞った。

バリーン！！

「!？」

鉢植え！？

俺は思わず真上を見た。

「えっ。 え!？」

「ごめんなさい!! 大丈夫かしら？」

——まさか。

「は、はい・・・」

シスター!?

「・・・本当に? 良かった」

嘘だろ。

探してたシスターが出て来た。
窓から顔を出した。
俺に話し掛けてきた。

何でかっていうと、鉢植えが落ちてきたから。
ん？ 鉢植え？

「あの、良かったら、教会まで入ってきてくれないかしら。念のため、診ておきたいんです」

入っていいの!?

ってか、診るって何処を!!

「あの・・・」

「なっ、なら！お言葉に甘えて、お邪魔します！」

「玄関は―」

「分かります！！大丈夫です」

「あら・・・」

シスターは微笑を浮かべ、軽く頭を下げた。

そして、何処かへ行った。

玄関へ向かったのだろうか。

「ここかな」

俺は少しだけ歩き、取っ手の付いた綺麗な扉を見つけた。

取っ手を引いてみる。

キィ・・・

開いた。

この先にあのシスターが・・・。

緊張で震えてきた。

更に大きく扉を開いた。
教会の中が見えた。

「
.
.
.
.
.
.
」

白。

その一言がピッタリだった。

天井も壁も床も。
並べてある無数の椅子も。

それら全てが、純白に光っていた。

「さっきは、本当にごめんなさい」

この人がいて、この教会が成り立つ。

「・・・いえ」

俺は教会の凄さに圧倒された。
教会の中なんて、生で見たことがないからかもしれないけれど。

「こちらへどうぞ。お茶を淹れました」

「え？あ、ありがとうございます」

いけないいけない。

俺は教会を鑑賞しに来たんじゃない。
シスターに会いに来たんだ！

「怪我してませんか？頭とか・・・」

「平気ですよ。右肩をかすってすらいませんし」

俺は今までシスターを見ていただけだったのに、何故だろう。

初めて話すのに、すごく自然に言葉を紡げる。

「・・・そうみたいです。良かった」

シスターは俺の頭をちらっと見たあと、微笑した。

あああ。美しい。

「・・・あの。ところで、何故に鉢植えが」

俺はずっと感じていた疑問を口にした。

「花に水をやっていたんです。うっかりジョウロが鉢植えにあたつて・・・」

「お花ですか。シスターらし・・・素敵ですね」

シスターらしい、と言おうとして、はっとした。
だって、今日会ったばかりの人間に、毎日会ってるみたいな発言はちょっと・・・。

『あなたのことを二年前から、毎日見てました』　なんて、言いづらい。
言えない。

そんなこと言ったら、ただの変態じゃないか!!

「素敵だなんて、そんな。――あの、貴方は何処からいらしたんでしょうか。私の予想ですが、近くにある中学校ではないでしょうか」

え。何で分かったんだ。超能力者か？
さすが神に仕える人は違うなあ。

「制服だったものですか」

「あ、ああ。そうです。そこの中学校の生徒です」

そうか。学校を出て、真っ直ぐここに来たんだ。制服だったんだ。
忘れてた。

「ふふ。当たりましたね。——良ければ、お名前の方も・・・」

名前まで！？
積極的だなあ。

「浅原 優と言います。その中学校の、3年生です。今年で、卒業なんです」

そう、今年で卒業。

「良いお名前ですね」

「いえいえ、シスターのお名前の方が素晴らしいですよ」

ん？ 『シスター』は名前じゃないぞ。
敬称みたいなもの・・・だよな。

「クスクス。私の名前、知っているんですか？」

シスターは口を手で隠して笑っているが、知る訳ないじゃないか！
今まで、遠くから見ていただけだったんだし・・・。

「分かりません」

「ふふ」

まだ笑ってる・・・。

俺は何気なく、左手首に視線を落とした。

何か光ってる。

ああ、腕時計だ。

しばらく時計見てなかったから分かんないけど、今何時だろう。

・・・夜じゃないだろうな。

教会の中からじゃ、外の様子が見えない。

夜だったらマズいぞ。

「・・・ンげっ!!」

「? どうかなさいました?」

間拔けな声を上げた俺に驚いて、シスターは聞いてきた。

「もう5時・・・。すみません! シスター、もう帰らなくちゃ」

「あら・・・」

午後6時には夕食が始まる。それまでに帰らないと・・・。

「美味しいお茶、ありがとうございました!!
あと、あの・・・」

「?」

「また、来ても良いでしょうか? 何て言うか、その・・・社会見学に。今日もそのつもりで・・・」

「・・・ふふふ。歓迎します。私も、話し相手が出来て嬉しいです
よ」

やった!!
シスターはやっぱりシスターだ!

「――それでは、お気をつけて」

「はい!! それでは」

俺はシスターに見送られ、教会を出た。

「・・・はあ」

スラスラ喋れた。
でも緊張した。

夢じゃないかな？

ありがちだけど、俺は自分の頬をつねってみる。

「痛い」

どうやら夢じゃないらしい。
そして俺は馬鹿らしい。

実感がわかない。

俺、このまま死んでも良いかもしれない。

・・・いや、死んじゃダメだ。

頭がクラクラする。
もちろん、鉢植えのせいじゃない。

何はともあれ、今はまず、寮に帰ることだ！

考えるのは、それからだ——

3 最初の話

「いらっしゃい」

昨日、とりあえずは夕食に間に合った。

その後は部屋に戻り宿題をしたりして、変わらぬ夜を過ごした。

「お邪魔します・・・」

そして俺はまたここにいた。

女神のような笑みを讃えるシスターに挨拶をする。

「早速来てくださったのね。お茶も淹れておきましたよ」

「え！ どうも」

事前に淹れておいてくれたのか。
用意良いなあ・・・。

「良いのよ。独りより、2人が好きだし」

そうなのか。
シスターっていつも1人だったから、あんまり人が好きじゃないのかと思ってた。

「・・・社会見学でしたよね。何からお話しましょうか」

そうだった。
そう言ったんだっけ。
忘れてた。

「お話、してもらってもよろしいんですか？」

「構いませんよ。だって、中を見て回るだけじゃ、歴史の全貌は分からないでしょう？」

歴史の全貌って。

俺、難しい話は苦手なんですけど・・・。

「まあ、そうですね。・・・でも俺、歴史とか、難しい話は苦手です」

「・・・ふふふ。では、別の話にしましょうか」

笑われた。

「ではまず・・・環境について――なんて、どうでしょう」

「えっと、喜んで聞かせてもらいます」

今更だけど、今まで遠かったシスターがこんな近くにいる。

信じがたい現実。

しかも、話まで聞かせてもらえるなんて。

「――最近、温暖化が問題になっていますよね」

「はい」

「では何故、問題になっているのでしょうか？」

学校の先生みたいな聞き方するなあ。

何か、テストに出そう。

「人間が、ガスを増やしたからですよ。車とか、二酸化炭素放出機ですしね。」

あと、無意味な都市化も温暖化の原因ですよね」

これくらいなら分かる。学校で、習ったからな。

「素晴らしい！ では、貴方は、これから温暖化にどうなって欲しいですか？」

「へ？」

「そのままの意味ですよ。温暖化が止まって欲しいですか？ 温暖化が進んで欲しいですか？」

シスターが笑顔で俺に問い掛ける。

そりゃあ、一般的には『止まって欲しい』んじゃないの？

「進んでは欲しくくないですね。だって、地球の環境が崩れたら、俺

「たち人間にも被害がきますから」

「・・・“人間”だけですか？」

「え？ そりゃ、地球に生きるもの全てが」

「そうですよね」

シスターは俯いた。

心なしか、表情が暗いように・・・。

怒らせたかな？

「あの、シスター、すみません。そういうつもりで言ったんじゃないんです」

「分かっています。ただ・・・」

ただ？

「全ての人間に、動物達にも優しくして欲しいんです。確かに動物

は人間に比べると、知能や思考力に劣ります。
でもこれは、裏を返せば“純粹”ということなのです」

「・・・」

「そういう者にこそ、本当の優しさを与えるべきでは？」

確かに動物は、人間よりは能力が劣るけど、素直で真面目だよな。

人間はそれに付け込んで、虐めを繰り返す。

「シスターの言うとおりです。

・・・いつそのこと動物が、世界を支配してくれないかな。

そうすれば環境はどうにしろ、人間世界のような醜い争いは起きないと思うんですけど」

「・・・それも良さそうですね。でも、闘争本能は、生きるものであれば誰にもありますからね。

・・・いつか、平和が訪れますように」

シスターはそう言って、魂を奉っているであろうマリア像に向かい、手を合わせた。

俺もそれに倣う。

“ 平和が訪れますように ”

そんなことを、密かに願った。

4 差別言葉

夕日が空を覆い始めた頃。

一羽のカラスが鳴き、緑の葉が揺れた――

「もうすっかり夕方ですね」

「そうですね。いつも学校が終わってから来てるので、少ししか時間がありませんが――よろしくお願いします」

「はい。こちらこそ」

今は4時20分。

6時から夕食だから、5時にはここを出ないと。

「――“差別”の話でもしましょうか」

「え？はい」

差別か。

何かシスターって、社会的な話が好きだなあ。

「差別について、どう思われますか？」

早速質問が来た。

気のせいか、シスター、もう感傷的になってないか？

「差別と聞いたら、一般的には人種差別や男女差別を思い浮かべますね

——俺は、差別は良くないことだと思ってます。だって、みんな平等に生まれたんですから。

まあ、育つ環境で性格も変わってきますけど」

「他の差別は？」

「他？うーん。差別なんて、毎日誰もがしていますよ。苛めなんかも差別だし。

『お兄ちゃんなんだから〇〇しなさい』とかいうのも、差別ですしね。

これを教育者である親が言ってるんだから、何ていうか——情けな

いですね」

俺はお兄ちゃんじゃないから言われたことはないが、そういう話はよく耳にする。

兄弟差別——とでも言うのがお似合いかな。

「本当ですね。でも人は、もっと細かに差別していますね。

『こんな○○なのに』とか、毎日何回も口になっているんじゃないやありません?」

確かに。

『こんな小さいのに』とか、『こんな所で』とか、よく聞くな。

でもそれは、国語の・・・文法とかじゃなかったっけ。

物や事を、より分かりやすくするための。

「それも差別なんではようか? いわゆる文法だと思うんですけど」

「私は、差別だと思っています。

例えば息をしていなくても、私達と同じ環境にある、私達を助けてくれる、地球上のものですよ」

地球上のもの全てに優しく・・・ってことか。
シスターらしいや。

「長々とお話してしまつて、すみませんね。そろそろ帰る時間では？」

そんなに長々と喋つてたっけ。

俺は腕時計を見る。

「あー本当だ。もうすぐ5時です」

俺は教会の玄関を出ようとしていた。

「今日もありがとうございます。シスターの話・・・ためになりました」

「いえいえ。私に出来るのはこれくらいしかないですから。あ、『しか』は駄目ですね。これくらいですから」

真面目な人だなあ。

教会に勤めるだけあって、差別が嫌いなんだ。

・・・とかいうセリフも、差別なのかもしれない。

「お気をつけて」

「はい！出来れば、また明日——」

外は、さっきよりも暗くなっていた。

夕闇に映る教会も、また、美しい——

5 非道人

「――“苛める”っていう行為は、人間なら誰もが行いますよ」

今日は雨だった。

水が教会を叩きつける音が煩い。

そのおかげで、いつもは平穏な雰囲気醸し出している真っ白い椅子も、真っ白い壁も、

何だか不気味な雰囲気を感じた。

「シスターもそう思うでしょう？」

「はい」

今日のお題は『苛めについて』。

何て言うか、今の天気ぴったりな話題だ。

「誰にでも競争意識があります。生きている限り、なくなることはありません。だから、現代では“苛め”にすり替わったんですね」

シスターはそう言い、上品にお茶を啜った。

さつきから思ってたけど、今日は違う茶葉なのだろうか。
いつもより少し苦い。

「昔もありましたからね。女同士の争いとか。深くは知りませんけど」

昔の人達もかなり陰湿だったらしい。

先生が言ってた。

「そうですね。一夫多妻など、女同士の争いは絶えなかったらしいですね」

「・・・シスターは、一夫多妻には反対ですか？」

何となく、興味があつたので聞いてみた。

「え？　そうですね．．．．．反対、でしょうか」

シスターは困ったように答えた。
どうしてだろう？

「大昔は、女性も男性にとって性の対象でしかありませんでしたから。だから、一夫多妻が通用したんでしょう」

なるほど。

「それが現代になり人々の知能が発達し、思考も変わり、男女平等になりました。その結果、一夫多妻は禁止されました」

「．．．」

「人は人に尽くさなければならぬ．．．故に、私は一夫多妻には反対です。」

1人の人間をどれだけ真剣に愛せるか．．．
それが大切なことです」

——シスターって、深いなあ。

人と違った見方が出来る、軽い考えを持たない……。

俺が小さい頃に思い描いていた『シスター』は、まさにこんな感じだった。

今、俺の目の前には理想のシスターが座っていた——

「——話が逸れましたね。ごめんなさい」

シスターは謝った。

話を逸らしたのは俺の方なのに……。

「話を戻しましょうか。苛めについて」

「はい。・・・まあ、要するに、弱い者をつくるために、苛めをするんじゃないでしょうか。俺はそう思います」

人間社会は利口そうに見えて、利口じゃない。

「人より優位に立ちたい・・・だから、弱い者をつくるんですよ。集団で」

1人で苛めをしていたら冷たい目で見られるが、それが集団だと、正しく見えてしまうのだ。

“苛め”という悪意の塊の行為が。

「・・・人の心理は複雑です。誰かが見ていないと、何にも出来ないんですから」

シスターはそう言い、静かに溜め息を吐いた。

「あの、シスター。もう帰りますね。時間なので」

「・・・はい。お見送りしますよ」

シスターは笑顔に戻っていた。

——俺が外に出ると、外は相変わらずの雨だった。

透明色の傘を開き、頭上に掲げる。

地面を見ると、小さな花が雨に濡れて曲がっていた。

・
・
・
何となく、さっきまで一緒にいたあの人を連想した。

6 百年の奇跡

「あれ・・・シスター、今日は外仕事ですか？」

俺がいつも通り教会を訪ねると、扉の近くにシスターがいた。

「ええ。 昨日、雨が降ったでしょう？だから、土を戻そうと思いまして」

「土を戻す？」

「土が崩れてしまったから、平らにしよう」と

「・・・ああ」

何処までも優しい人だ。

「でも、スコップか何か使ったらどうです？」

手作業じゃ疲れませんか？」

「平気ですよ。それに、道具じゃない方が自然に優しいんです」

「・・・」

そう言って、透明な手袋を纏った手で土を平らに引き伸ばしていく。

「手伝いますよ」

「・・・良いんですか？なら、どうぞ。手袋を」

シスターは一旦自分の手袋を脱ぎ、ポケットから新たな手袋を取り出した。

「どうぞ。・・・優君」

「あ、ありがとうございます」

今、名前で呼んでくれた！？
名前呼んでくれたの、初めてだよ・・・？

「――何処をやるんですか？」

「今私がやってる所で終わり。他の所は、土が綺麗だったから」

「あ、じゃあすぐに終わりますね」

「そうですね」

シスターはそう言うと、再び下を向いて土を直し始めた。

・・・シスターの態度がつれない気がするけど、俺も頑張るか。

「――そろそろ良いでしょう。中へ戻りましょうか」

「はい」

シスターは扉に向かって歩き出した。

俺は何の気なしに教会を見た。

・・・いつ見ても、神秘的だ。

俺はついこの間まで遠くから見ただけだったけど、この教会に親近感を感じる。

何てったって、2年前からずっと見てたんだからな。

「あの、シスター。思ったんですけど」

俺は後ろ姿のシスターに声を掛ける。

シスターはゆっくりと、俺の方を向いた。

「何でしょう」

「大したことじゃないんですけどね。」

この教会って、いつ頃建てられたんです？
建物自体は、新しいっぽいですけど」

するとシスターは、しばらく思案顔になった。
何だろう？

「99年前です。今年の3月13日に、100年目になります」

「99年前！？そんなに古いんですか？建物が綺麗だったから、も
っと新しいと思ってました」

「・・・ふふふ」

シスターは笑ってるけど、俺は本当に驚いた。
それにしても・・・3月13日って、何か引っ掛かる。

「シスターはいつ頃からこの教会にいるんですか？」

「え？」

「何となく、気になって」

シスターは、首を傾げてしばらくした後、申し訳なさそうに答えた。

「・・・ごめんなさい。覚えてないの」

えー。

普通、忘れるもんかな？

俺の予想では、5年前くらいかなあと思ったんだけど。
だって、シスター、若いし。

・・・そう言えば、シスターって何歳なんだろう？

「・・・・・・・・」

聞きたいけど、聞けない。

女性に年齢を聞くのは禁句だって、先生が冗談で言ってたもんなあ。

「・・・優君？」

「あ、はい！」

「戻りましょう？」

シスターが目を細めて優しく笑う。

俺もそれにつられて、口を吊り上げる。

「はいっ!!」

さっきも“優君”って呼んでくれた。

今日は2回も名前呼ばれちゃった。

・・・何か、明日は良いことありそうな気がする♪

7 雪の日の天使

「シスター、見て。雪が降っていますよ」

教会の中の小さな窓から見える景色には、ちらほらと白いものが映った。

雪だ。

「まあ・・・珍しいですね。この間までは雨だったのに」

「そうですね」

俺が土日で2日も教会へ来ないうちに、もう2月も下旬に差し掛かった。

「忘れていたけど・・・もう、春なんですよね」

そして俺も卒業か。

「このあたりは季節感があまりない地域ですからね……。もうすぐ3月になるっていうのに、今更雪です」

そう言って、シスターは悪戯っ子のように笑った。
・・・こんな表情もするんだ。

「――雪を見ると、天国を思い出します」

「天国？」

「はい」

『天国を思い出します』って言い方も変じゃないか？
『天国を連想します』とかなら、分かるんだけど。

「天国には、何があるんでしょう」

シスターは遠い目で、下を向いたまま言う。

「何が・・・幸福、とかじゃないですか？」

「物は？」

「うーん。ないような気がします。あるとしたら雲じゃないですかね。」

「・・・地獄だったら、崖とか海とか。そもそも地獄があるかも分からないですけど」

「優君は・・・どちらに行きたいです？天国か地獄か。もし、死んだとして」
また、ぶっ飛んでる質問・・・。

「死んだとして・・・か。何か、考えられないですね。俺は天国に行きたいです。地獄は、苦しみしかないでしょうから」

「本当にそうでしょうか」

「え？」

「地獄は、罪を洗う場所です。何も知らないで天国に行くより、地獄で洗い流してしまった方が良いのかもしれないかもしれません。」

——自分自身の全てを」

自分自身の全て……。

「神に仕えるシスターがそう言うってことは、その……地獄ってあるんでしょうか」

すると、シスターはまたしても微笑んだ。

「ふふふ……どうでしょうね。自分で考えて下さい」

「そんな。俺って地獄行きですか？」

「ふふ」

シスターは微笑むだけで、答えてはくれなかった。

8 魔女裁判

——今日から3月。

あの日以来、雪は一切降らなくなってしまった。

「・・・処刑場？」

相変わらずシスターは掴めない人だ。

時々、見ているだけの頃よりも、話している今の方がシスターを遠く感じる。

「ええ。本当の話です。大昔、この場所は処刑場だったのです。・・・
・魔女の」

「魔女裁判ってやつですか。聞いたことがあります」

何かの本に載ってたな。

「魔法を使える魔女を恐れた人間が、処刑を執行したんですよね」

「ええ。そういう内容でした」

「処刑方法は火炙りでしたっけ。

それで死んだら人間で、死ななかったら魔女。

一度魔女じゃないかと目を付けられた人間は最後。

確かめる方法は、火炙りしかなかった・・・」

「優君は詳しいですね。私が話す必要もないみたい」

シスターは、軽く拍手を送ってくる。

「本で読んだんですよ。小学生の頃」

小学生の頃、朝読書で読む本がなかったから、教室の後ろにある本棚から適当に本を取った。

その本が偶然、魔女裁判についての話だった。

・・・あれは酷かった。

血やら何やらグロテスクなものばかり出てくるので、読んでから20ページくらいで中断した。

あれは、小学校の本棚に置くものじゃないな。

「そうだったんですか・・・」

「今でも内容を覚えていますよ。グロテスク過ぎて、トラウマになりましたから」

俺は更に深く椅子に掛ける。

あー、思い出したくない。

「でも、シスター。何となく分かる気がします。此処は緑が美しい・・・亡くなられた魔女達も、きっと今は静かに眠っていますよ」

「・・・そうでしょうか？」

珍しくシスターの顔が強張る。

「そうですよ。もう何百年も前の話でしょう？考えたって仕方ないですよ。時間が解決してくれることもあります」

「・・・・・・・・」

シスターは黙り込んでしまった。

・・・俺、怒らせるようなこと言っただろうか。

「あの、シスター。もう帰りますね。今日は用事がありました」

「・・・・・・・・」

「それじゃ、また明日」

シスターは、最後まで上を向いてくれなかった。

俺に用事なんてない。

――シスターから逃げるための口実。

今まで知らなかったけど、普段にこにこしてる人間の表情が一変するって、こんなに恐ろしいものだったんだ。

9 草木の唄

「こんにちは、シスター。今日も良い天気ですね」

「あら・・・優君」

シスターはそう言い、右手を振ってくれた。
・・・笑顔で。

「シスター、明日は俺の卒業式なんです」

願っていたんだか願っていなかったんだか分からない日。

「卒業式・・・そうね、優君は3年生だもの」

覚えててくれたんだ。

明日は3月13日。

・・・3月13日？

「――俺がこの教会に来れるのは、明日で最後になります」

「・・・そうでしょうね」

シスターは別に動揺した風でもなく、自然にそう言った。

「それであの・・・シスターにお願いがあります」

「・・・何でしょう？」

シスターは目を細めた。・・・微笑んだのだ。

「今までこの教会に毎日・・・土日を除いてですけど、来ていましたよね。」

今更なお願いです。

「——明日、この土地での最後の時間を、俺と過ごしてくれませんか？」

一瞬目を見開いたあと、目を閉じた。

・・・驚いたんだろうか。

「もちろんですよ。ふふふ。・・・でも、寂しいですね。優君がいなくなってしまうと、私の話相手もいなくなってしまうます」

そう言ってシスターは、カップの中の黒い緑に視線を落とした。

「そ、そんなの俺だって同じですよ！卒業したらこの教会で働きた

いくらいです」

「・・・ふふ。そう言ってもらえると嬉しいです」

・・・ガタガタ！
ガタガタ・・・

「？ 何の音でしょう」

「風が出てきたんでしょうね。ほら、見て下さい。木が揺れていま
す」

シスターに手招きされ、俺は窓に近付いた。

・・・本当だ。

あんなに大きい木まで揺れてる・・・。

「こんなに風が出るのは久しぶりです。
・・・どうしたんでしょう」

首を傾げるシスター。

何故か俺は、木がざわめく音に違和感を覚えた。

音・・・そう、唄だ。

不浄の唄。

10 真白の地獄

「こんにちは、シスター。いや、おはようございます、かな」

「・・・ふふ。おはようございます、優君」

今は9時40分。

さっき、卒業式が終わったばかりだ。

早いだろう？

この学校は、卒業式の時だけ午前6時半登校。
そして、卒業式が午前7時半から始まる。

「卒業おめでとうございます」

「えっ、これもらって良いんですか！？ありがとうございます！！」

シスターから手渡されたのは、一輪の花だった。・・・何て言う花だろう。分かんないや。

「その花は、私が時間をかけて、大切に育てた花です。どうか優君も、大切にしてあげて下さいね。・・・私だと思って」

「・・・はい」

シスターはやっぱり、俺にとって遠い存在だ。

会って話をしてみて、近くに感じることであった。

・・・けれど時々見せる影のある表情に、何処か計り知れないものがあった。

シスター、だから俺は――――

「優君。・・・私についてきてくれませんか？見せたいものがあるの」

「はい」

シスターは、左側にある立派な装飾のされた扉に入っていく。

俺もそれについていく。

「シスター、今まで、本当にありがとうございました。たったの二ヶ月間くらいでしたけど、勉強になりました」

「こちらこそ。でも、『たった』は差別語ですよ。優君」

「あ……。えっと、二ヶ月間、とても勉強になりました！楽しかったです」

「ふふ」

シスターは微笑を浮かべた顔をちらりと後ろの俺に向けたあと、早足で歩き始めた。

——でも、本当に勉強になったよな。

学校の授業とは全然違って・・・。
それもやはり、神に見初められしシスターだからなのかもしれない。

「——あれ？」

シスターがいない。

俺が下を向いて歩いているうちに、先に行ってしまったのだろうか。

「・・・・・・」

この扉だよな。

通路は一本道だったし、他に扉はない。

俺は、その茶色いシンプルな扉を開いた。

「――!?」

愕然とした。

だって中は・・・・・・・・

「ほ、骨? 骸骨!？」

上から下までしっかり繋がった真っ白い骸骨が、棺の中から見え隠れしていた。
何体も。

「シスター?」

シスターはいない。
返事も聞こえて来ない。

「・・・あの服」

黒と白の混ざった、十字架を刻む・・・・・・あれは、シスターの服だ。

よりによって、醜い骸骨が着てしまっている。

「まさか」

俺はシスターからもらった、白いシスター自身を落としてしまった。

「・・・まさか。3月13日、今日は――」

魔女狩りノ――・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1586o/>

sister.

2011年5月1日17時39分発行